

# 郊外

国木田独歩

青空文庫



ときだ  
時田先生、名は立派なれどそんりつ村立小学校の教員である、それも  
四角な顔の、太い眉まゆの、大きい口の、骨格のたくましい、背せいの低い、言うまでもなく若い女などにはあまり好かれな方かたの男。

そのくせ生徒にも父兄にも村長にもきわめて評判のよいのは、  
どこか言うに言われぬ優しいところがあるので、口数の少ない代  
わりには嘘うそを言うことのできない性分、それは目でわかる、いつ  
も笑みを含んでいるので。

嫁を世話をしよう一人ひとりいいのがあると勧めた者は村長ばかりで

はない、しかしまじめな挨拶あいさつをしたことなく、今年三十一で下宿住まい、このごろは人もこれを怪しまないほどになった。

梅ちゃんむめ、先生の下宿はこの娘のいる家うちの、別室はなれの中二階である。下は物置で、土間どまからすぐ梯子段はしごだんが付いている、八畳一間ぎり、食事は運んで上げましょというのを、それには及ばないと、母屋おもやに食べに行く、大概はみんなと一いっしょ同に膳ぜんを並べて食うので、何を食べささりようと頓とんちやく着やくしない。

梅ちゃんは十歳とおの年から世話になったが、卒業しないで退校ひいしても先生別に止めもしなかった、今は弟の時坊が尋常二年で、先生おその厄介おそになっている、宅うちへ帰ると甘えてしかたがないが学校では畏おそれている。

先生の中二階からはその屋根が少しばかりしか見えないが音はよく聞こえる水車すいしや、そこに幸ちゃんこうという息子むすこがある、これも先生の厄介になつた一人で、卒業してから先生の宅うちへ夜分やぶん外史を習いに来たが今はよして水車の方を働いている、もつとも水車といつても都の近在だけに山国の小さな小屋とは一つにならない。月に十四、五両も上がる白うすが幾個いくつとかあつて米を運ぶ車を曳ひく馬の六、七頭も飼つてある。たいしたものだと梅ちゃんの母親などはしよつちゆううらやんでいるくらいで。

『そんならこちらでも水車をやったらどうだろう、』と先生に似合わないことをある時まじめで言いだした。

『幸ちゃんこうとこのようにですか、だつてあれは株ですものう、水

車がそういつだつてできるもんならたれだつてやりますわ。』お  
かみさんは情けなそうに笑つて言った。

『なるほど場処がないからね工。』先生はまじめに感心してそれ  
で水車の話はやんで幸ちやんのうわさに移ツた。

お神<sup>かみ</sup>さんはしきりと幸ちやんをほめて、実はこれは毎度のこと  
であるが、そして今度の繼<sup>ままはは</sup>母はどうやら人が悪そうだからきつ  
と、幸ちやんにはつらく当たるだろうと言ツた。

『いい歳<sup>とし</sup>をしてもう今度で三度めですよ、第一小供<sup>こども</sup>がかあいそう  
でさア。』

『三度め！』先生は二度めとばかり思ツていたのである。

『もつとも幸ちやんの母<sup>おふくろ</sup>親<sup>な</sup>は亡くなッたんですけれども。』

この時、のそり挨あいさつ拶なしに土間に現われたのが二十四、五の、小づくりな色の浅ぐろい、目元の優しい男。

『オヤ幸ちやんが！ 今お前さんのうわさをしていたのよ。』実はお神さん少し驚いてまごついたのである。

『先生今日は。』

『この二、三日見えないようであつたね。』

『相変わらず忙しいもんですから。』

『マアお上がんさいな、今日こんにちはどちらへ。』お神さんは幸こうき吉きちの衣装なりに目をつけて言った。

『神田かんだの叔父おじの処へちよつと行って来ました、先生今晚お宅でしようか。』幸吉の言葉は何となく沈んでいる。

『在宅いるとも、何か用なんだろうか。』

『ナ二別に、ただ少しうばかし……』

『今夜宅うちで浪花節なにわぶしをやらすはずだから幸ちゃんもおいでなさいな、そらいつかの梅ばいりゆう竜』お神さんは卒然言葉をはさんだ。

『そうですか、来ましよう、それじゃあまた晩に』と言つて幸吉は歸つてしまつた。

『幸ちゃん今日きょうはどうかしているよ』とお神さんは言つたが、先生別に返事をしないで立て膝ひざをしながらお神さんの手元をながめていた。お神さんは時田のシャツの破綻ほころびを繕つくっている。

夜食が済むと座敷を取り片付づけるので母屋おもやの方は騒いでいたが、それが済むと長屋の者や近所の者がそろそろ集まって来て、がや

がやしやべるのが聞こえる。日はとつぷり暮れたが月はまだ登らない、時田は燈火も点けないで片足を敷居の上に延ばし、柱に倚りかかりながら、茫然外面をながめている。

『先生！』梅ちゃんの声らしい、時田は黙って返事をしない。

『オヤいなのだよ』と去ってしまった、それから五分も経ったか、その間身動きもしないで東の森をながめていたが、月の光がちらちらともれて来たのを見て、彼は悠然立って着衣の前を丁寧に合わして、床に放棄つてあつた鳥打ち帽を取るや、すたころと梯子段を下りた。

生垣を回ると突然に出つくわしたのがお梅である。お梅は

きやんな声で

『知らないよ。いいジャアないかあたしがだれのうわさをしようがお前さんの関かまった事ジャアないよ、ねエ先生！』

時田は驚いて木のこ下した闇やみを見ると、一人の男が立っていたが、ツイと長屋の裏の方へ消えてしまった。

『だれ。』時田は訊たずねた。

『源公の野郎やろう、ほんとにこの節は生意気になったよ。先生散歩？』お梅は時田のそばに寄って顔をのぞくようにして見た。

『あの幸ちゃんが出来たら散歩に行つたつて、そしてすぐ帰るからツて言っておくれ、』と時田は門を出た。お梅は後あとについて来て、『すぐお帰んなさいナもう梅ばいりゆう 竜りゆうが出来ましたから。あらお月さま！』お梅は立ち止まった。時田は橋を渡つて野の方へと行つて

しまった。

二時間も経たつたらどうか、時田の帰つて来たのは。月影にすかして見ると橋の上に立っているのはお梅である。

『先生どこを歩いていました今まで、幸ちゃんがさつきから待つていますよ。』

『梅ちゃんここで何してたの。』

『先生を待つていました、幸ちゃんの用ツて何でしょう。』

『何だか知らない。何だつてよいジャあないか。』

『だって何だか沈鬱ふさいでいるようだから……もしかと思つて。』

『ああ少し寒くなつて来た。』

二人は連れだつて中二階の前まで来たが、母屋では浪花節ななわぶしのふたり

ふたき  
二切りめで、大夫たゆうの音がするばかり、みんな耳を澄ましていると見えて肅然しんとしている。

『幸ちゃんに今帰ったからツて、そ言つておくれ、』と時田は庭の耳門くぐりへ入った、お梅はばたばたと母屋おもやの方へ駆け出して土間へそつと入ると、幸吉が土間の入口に立っている。

『帰つて?』幸吉は低い声で言つた。

『今帰つてよ、用が済んだらまたお寄んなさいナ。』お梅の声もささやくよう。

『ありがとう。』幸吉は急いで中二階の方へ行つた、しかし頭を垂れたまま。お梅は座敷の隅すみの方の薄暗い所に蹲居つくなんで浪花節を聞いていたが、みんなが笑う時でも笑顔えがお一つしなかつた。二切り

めが済むと座敷はにわかになぎやかになつて、煙草たばこを吸うやら便所に立つやら大騒ぎ。

『お梅。』母おふくろ親がきよろきよろと見回すと、

『なに。』お梅は大きな声で返事をした。

『どこにいたのきつきから。』

『ここで聴きいていたのよ、そして頭が痛くつて……』と顔をしかめて頭をこつこつと軽くたたく。

『奥へ行つて、寝やすみな、寝てたつて聞こえるよ。』母おふくろ親は心配そうに言う。それでもお梅は返事をしないでそのまま蹲つくなん居いた。そのうち三切りみきめが初まるとお梅はしばらく聴いていたが、そつと立つて土間へ下りると母おふくろ親が見つけて、低い声で、

『奥でお寝みな。』半ばしかるように言った。お梅は泣き出しそうな顔をして頭を振って外面へ出た。月は冴えに冴え、まるで秋かとも思われるよう。庭木の影がはつきりと地に印している。足を爪立てるようにして中二階の前の生垣のそばまで来て、垣根越しに上を見あげた。二階はしんとしている。この時母屋でドツと笑い声がした。お梅はいまいましそうに舌うちをして、ほんといつまでやってるんだらうとつぶやきながら道へ出た。橋の上で話し声が聞こえるようだから、もしかと思つて来ると先生一人、欄干に倚つかかツて空を仰いでいた。

『オヤお一人？』

『あア。』気のない返事。

『幸ちゃん帰りましたの？』お梅も欄干に倚よつて時田の顔をじつと見ている。

『今帰ったよ、』と大あくびをして『梅ちゃんどうして浪花節聴かないの、僕一つ聴いて来ようか。』

『およしなさいよつまらない！ あたし聴いてたけど頭が痛くなつて逃げ出したの。』

二人はしばし黙っていた。水車へ水を取るのので橋から少し下流に井堰いせきがある、そのため水がよどんで細長い池のようになってい、その岸は雑木ぞうきが茂つて水の上に差し出ているのが暗い影を映しました月の光が落ちているところは鏡のよう。たぶん羽虫はむしが飛ぶのであろう折り折り小さな波紋が消えてはまた現われている、お

梅はじつと水を見ていたが、ついに

『幸ちゃんの話は何でした。』

『神田の叔父の方へしばらく往いつていたいけどどうしたもんだらうと相談に来たのサ。』

『先生何と言つてやりました。』お梅は時田の顔を見て言ったがその声は少し震えていた、しかし時田はそんなことには気がつかないかして、すこぶる平気で、

『なるべくは家うちにいた方がよからう、そうしないとなおの事おふく継つぐ母ろとの間がむずかしくなるからッて、留めてやった、かあいそ  
うに泣いていたよ。』

『泣いて？ まアかあいそうに。』お梅は涙ぐんで黙つてしまつ

た。それも時田には気が付かない、

『なんでも詳しい事は聞かなんだが、今度の継母おふくろに娘があつてそれが海軍少将とかに奉公している、そいつを幸ちゃんの嫁にしたいと思つていろいろ、幸ちゃんはそのがいやでたまらない、それを継母おふくろが感づいてつらく当たらしい、だから幸ちゃんの身になつて見るとたまらないサ。』

『そうなのよ、わたしもその事はちよつと聞いてよ、そうなのよ、だつてあんまりそれは無理だわ……』まだ何か言いそうな時、突然橋の上を通り掛かった男、お梅の顔をのぞき込んで

『オヤ梅ちゃん、今晚は、』と意味ありげに声を掛けて行き過ぎた。橋を渡つたと思うとちよつと振り向いて、

『忘れていた、幸ちゃんによろしく。』

『知らないわ、お菊さんが待つてるよ。』

『ハハハハありがとう。』いううち姿が見えなくなつた。

『お菊さんて踏切の八百屋やおやの娘だろうか。』時田は訊たずねた。お梅はうなずいたぎり黙つていた。

二

この日は近ごろ珍しいいい天気であつたが、次の日は梅雨つゆ前のこととて、朝から空模様怪しく、午後はじめじめ降りだした。普通の人ならせつかくの日曜をめちゃめちゃにしてしまったと不平

を並べるところだが、時田先生、全く無頓着むとんじやくである。机の前に端座して生徒の清書を点検したり、作文を觀みたり、出席簿を調べたり、倦くたぶれた時はごろりとそこに寝ころんで天井をながめたりしている。

午後二時、この降るのに訪たずねて来て、中二階の三段目から『時田！』と首を出したのは江藤えとうという画家えかきである、時田よりは四つ五つ年下の、これもどこか変物へんぶつらしい顔つき、語調ものいいと体みのこな度しとが時田よりも快活らしいばかり、共に青山御家人あおやまごけにんの息子むすこで小供の時から親の代からの朋輩ほうばい同士である。

時田は朱筆しゆふでを投げやって仰向けになりながら、

『君先せんだつて頼んで置いたのはできたかね。』

江藤は火鉢ひばちのそばに座すわつて勝手に茶を飲み、とぼけた顔をして、

『なんだツたかしら。』

『そら手本サ。』

『すっかり忘れていた、失敬失敬、それよりか君に見せたい物があるのだ、』と風呂敷ふろしきに包んでその下をまた新聞紙で包んである、画板がはんを取り出して、時田に渡した。時田は黙つて見ていたが、

『どこか見たような所だね、うまくできている。』

『そら、あの森のところサ御料地の、あそこから向こうの畑と林とを見たところサ。』

『なるほどそうだ、』といいながら時田は壁に下げてある小さな水彩画と見比べている。

『無論この方がまずいサ。ところがこの絵にはおもしろい話があるからそれで持つて来たがこれからまたこれを持つて行くところがあるのだ。』

時田は起ち上がつて火鉢のそばへ来て、『ふうん』とはなはだ気のない返事をして聞いている、これはこの人の癖だから対<sup>あいて</sup>手はなんとも感じない。

『昨日<sup>きのう</sup>はあのいい天気だからいつものように出かけて例の森、僕はまだあそこは画<sup>か</sup>いたことがないからどうせろくなものはできませんが、一ツ試みて見ようと、いつもの細<sup>みち</sup>い徑を例のごとく空想にふけりながら歩いた。実は——もう白状してもいいから言うが——

——実は僕近ごろ自分で自分を疑い初めて、果たしておれに美術家

たるの天才があるのだろうか、果たしておれは一個の画家として  
 成功するだろうかなんてしきりと自脈を取っていたのサ。断然こ  
 の希望をなげうってしまいかとも思ったがその時思い当たったの  
 は君の事だ。君がこうやって村立尋常小学校の校長それも最初は  
 ただの教員から初めて十年年という長い間、汲々乎きゆうきゆうことして勤めお  
 互いの朋輩ほうばいにはもう大尉たいいになつた奴やつもいれば法学士で判事にな  
 った奴もいるの知らん顔でうらやましいとも思わず平気で自分  
 の職分を守っている。もちろんこれは君の性分にもよるだろう、  
 しかしそれはどちらでもいい、ともかく一心専念にやっている  
 という事が僕は君の今日成功している所以ゆえんだと信ずる、成功とも！  
 教育家としてこの上の成功はないサ。父兄からは十二分の信用

と尊敬とを得て何か込み入ったことはみんな君のところへ相談に来て君の判断を仰ぐ。僕は今の教育家にこういう例はあまりなからうと思う。そこで僕は思った、僕に天才があるうがなからうが、成功しようがしなからうがそんな事は今顧みるに当たらない何でもこのままで一心不乱にやればいいんだ、というふうに考えて来ると気がせいせいして来た。

きのう昨日もちょうどそんな事を考えながら歩いて、つまるところがペンキの看版かんばんかきにならうが稲荷いなりや八幡はちまんさま様の奉納絵を画こうがかまわない。やるところまでやると決心したからには、わき目もふれないなどしきりに思い続けて例の森まで行つた。

どこを画こうかと撰えらんで見たが、森その物は無論画いたところ

で画えとしてはかえっておもしろくないから、何でも森を斜はすに取つて西北の地平線から西へかけて低いところにもしやもしやと生はえるならばやし 櫛はし 林 あたりまでを写して見ることに決めた。

道は随分暑かつたが森へ来て少し休むと薄暗い奥の方から冷たい風が吹いて来ていい心こころもち 持もち になつた、青葉の影の透きとおるような光を仰いで身体からだを横に足を草の上に投げ出してじつと向こうを見ていると、何という静かな美しい、のびのびした景色だろう！ 僕は何なんもかも忘れてしばらくながめていた。

でき上がったのがこれだ。われながらお話にはならないまずサ加減、しかし僕は幾度でもこれを画かく、まず僕の力でこれならと思うやつができるまでは何度でも写しにくると決心してかかった

のだ。ところでこのまづいやつをここまで画かき上げるのに妙なことがあつたのサ。

しきりと画かいていると、実景があまりよくツて僕の手がいかにもまづいので、画かいていながらまたもや変な気になつて何といひまづサだろう、これが画といわりようかおれはとてもだめなのかしらん、と思うと画かくのがいやになつてもうよそうかもうよそうかと思ひながらやっていた。すると後ろの森の方でガサゴソと妙な音がした。この時サ、僕は振り向いて見ようとしたが、待て！

こんな事では到底だめだ、たといまづかろうがまづいからこそ勉強して画かくのだ、奉納絵を画かいてもいいという決心はどうした、一心不乱とはここの事だ、たとい耳のそばで狼おおかみがほえようが心を

取り乱し気を散じないくらいでなければならぬのが、森の奥でちよつと音がしたつて、すぐそれに気を取られるようであるか、と、今度はまずくても何でもずんずん画いていると、ゴソツ、ガサツという音がだんだん近づいて来るようになり、い、その音がまたすこぶる妙なので、ちよつと僕が一心に画いているのをつけこんで後ろから何者か、忍び足に僕をねらうように思われる。さアそう思うと振り向いて見たくツてたまらない。しかし一たん見まいと決心したからには意地いじが出て振り向くのが愧はずかしく、また振り向くと向かないのとで僕うの美術家たり得るや否いなやの分かれ目のような気がして来た。

またこうも思った、見る見ないは別問題だ、てんであんな音が

耳に入る<sup>はい</sup>よう<sup>よう</sup>でそれが気になるよう<sup>よう</sup>でそのため<sup>ため</sup>に気をもむよう<sup>よう</sup>ではだめなんだ。もし真にわが一心をこの画幅とこの自然とに打ち込むなら大砲の音だつて聞こえないだろうと。そこで画板にかじりつくようにして画<sup>か</sup>きはじめた。しかし何の益<sup>やく</sup>にも立たない、僕の心は七分<sup>ぶ</sup>がた後ろの音に奪われているのだから。

そこでまたこうも思った、何もそう固まるには及ばない、気になるならなるで、ちよつと見て烏<sup>からすきつね</sup>か狐か盗賊か鬼<sup>じや</sup>か蛇<sup>じや</sup>かもしくは一つ目小僧<sup>おおにゆうどう</sup>か大入道<sup>おおにゆうどう</sup>かそれを確かめて、安心して画いたがよサそんなものだ、よろしいそうだと振り向こうとしたが、残念でたまらない、もしここでおれが後ろへ振り向くならもう今日<sup>きょう</sup>かぎり画家はやめるのだゾ、よしか、それでよければ向け、もしこの

森にいますとかうわさのある狂犬であつておれの後ろからいきなり頸筋へ食らいつくなら着いてもいいではないか。それで死んでもかまわない、こうなればもう意地だ！ この意地が通されないくらいなら美術家たるはおろか、何一ツしでかすものかと、今度はけんか腰になつて、人を後ろへ向かそうツて、たれが向くか、ざまを見ると今から思えばおかしいがほんとにそう独語を言いなから画き続けた。

音が近づくにつけて大きくなる、下草や小藪を踏み分ける音がもうすぐ後ろで聞こえる、僕の身体は冷水を浴びたようになって、すくんで来る、それで腋の下からは汗がだらだら流れる、何のことはない一種の拷問サ。

僕はただ夢中になって画いていたが目と手は器械的に動くのみで全身の注意は後ろに集まっていた。すると何者かが確かに僕の背なかにくつつくようにして足を止めた。そして耳のそばで呼吸の気合けはいがする。天下何なんびと人か縮み上がらざらんやだ。君のような神経の少し遅鈍の方なら知らないこと——失敬失敬——僕はもう呼吸が塞ふさいがりそうになって、目がぐらぐらして来た。これが三分も続いたら僕は氣絶したろう。ところが間もなく、旦那だんなはうめえなアと耳元で大声に叫んだ奴やつがある。

びつくりして振り向くと六十ばかりの老爺おやじが腰を屈かがめて僕の肩越しにのぞき込んでいるんだ。僕はあまりのことに、何だびつくりしたじゃアないかと怒鳴ってやツた。渠きやつ一向平気で、背負って

いた枯れ木の束をそこへ卸して、旦那は絵の先生かときくから先生じゃアないまだ生徒なんだというとすこぶる感心したような顔つきで絵を見ていた。』

ここまで話して来て江藤は急に口をつぐんで、あいて相手の顔をじつと見ていたが、思い出したように、

『そうだツけ、あの老爺おやしさんを写生するとよかつた、』と言つて膝ひざを拍うつた。この近在の百姓が御料地の森へ入はいつて、枯れ枝を集めるのは、それは多分禁制であろうが、彼らは大びらでやつているのである。その事は無論時田も江藤も知っていたので、江藤もよく考えたら森の奥のガサガサする音は必ずそれと気の付くはずなんだ。

『それはそうとして君、それから僕は内心すこぶる慙かしく思つたから、今度は大いに熱心になつて画き<sup>か</sup>だしたが、ほほできたから巻煙草<sup>まきたばこ</sup>を出して吸い初めたら、それまで老爺<sup>おやじ</sup>さん黙つて見ていたが、何と思つたか、まじめな顔で、その絵をくれないかと言いだした。その言い草がおもしろいじやアないか、こういうんだ、今度代々木<sup>よよぎ</sup>の八幡宮<sup>はちまんぐう</sup>が改築になつたからそれへ奉納したいというんだ。それから老爺<sup>おやじ</sup>しきりと八幡の新築の立派なことなんかしやべっているから、僕は聴<sup>き</sup>きながら考えた、この画はともかくもわがためには記念すべきものである、そして、この老爺<sup>おやじ</sup>もわがためには記念すべき人である、だからこの画をこの老爺<sup>おやじ</sup>にくれてやつて八幡に奉納さすれば、われにもしこの後また退転の念が生じ

たとき、その八幡に行つてこの画を見て今日のことを思い出せば、なるほどそうだとまた猛進の精神を喚起さすだろう。そうだとこ  
う考えて老爺おやじにくれてやることにした。老爺大變よろこんですぐ  
持つて帰るといふから、それは困る明日あすまで待つてくれる今日は  
自宅うちへ持つて帰つて少しは手を入れたいからと言つと、そんなら  
ちよつとわしが宅うちへ寄つてくれるじきそこだからツて、僕が行く  
とも言わないに先に立つてずんずんゆくから、僕もおもしろ半分  
についていったサ。思ったより大きな家うちで庭に麦が積んであつて、  
婆ばあさんと若夫婦らしいのがしきりに抜こいでいたが、それからみ  
んな集まつて絵を見るやら茶を出すやら大騒ぎを初めた。それで  
僕は明日あす自分で持つて来てやると約束して来たんだ。今日は降る

から閉口したが待っていると気の毒だから、これから行って来ようと思う。』

時田はほとんど一口も入れないで黙って聴いていたが、江藤がやつとやめたので、

『その百姓家に娘はいなかったか、』と真顔で問うた。

『アアいたいた八歳やつばかりの。』何心なく江藤は答える。

『そいつは惜しかった十六、七で別品べっぴんでモデルになりそうだと来ると小説だツたツけ、』と言って『ウフフフ』と笑った。この先生に不似合いなことを時々言つてそうして自分でこんなふうな笑いかたをするのがこの人の癖の一つである。

『そううまくは行ゆかないサ、ハハハハ、イヤそんなら行って来よ

うか、ご苦労な話だ、』と江藤が立ち上がろうとする時、  
生垣いけがきの外で、

『昨夜ゆうべまたやったよ、聞いたかねもう。今度は三十ばかりの野郎よ、野郎じゃアねツからお話になんねエ、十七、八の新造しんぞと来きなきやア、そうよそろそろ暑くなるから逆のぼ上せるかもしれないねエ。』と大きな声で言うのは『踏切やの八百屋』である。

『そうよ懐ふところが寒くなると血がみんな頭へ上つて、それで気が狂ちがうんだらうよ』と言つたのは長屋の者らしい。

『うまいことをいつてらア』と江藤はつぶやいた。

『おいらは毎晩逆のぼ上せる薬を四合瓶びんへ一本ずつ升屋ますやから買つて飲むが一向鉄道おうじよう往ま生まをやらかす気にならねエハハハハ』

『薬が足りないのだろうよ、今夜あたりお神さんにそう言つて二合も増ふやしておもらいな。』

『違えねえ、懐ふところが寒くならアヒヒヒヒ』と妙な声で笑つた。

## 三

その夜八時過ぎでもあろうか、雨はしとしと降っている、踏切の八百屋やおやでは早く店をしまい、主人あるじは長火鉢ながひぼちの前で大あくらをかいて、いつもの四合の薬をぐびりぐびり飲やっている、女房はその手つきを見ている、娘のお菊はそばで針仕事をしながら時々頭を上げて店の戸の方を見る。

『なるほど四合では足りねエ。』

『何がなるほどだよ。』女房はもう不平らしい。

『逆上のぼせの薬が足りないッてことよ。』

『ばか言つてらア。』女房には何のことだかわからない。

『お菊、もう二合取つて来てくんねエ。』

『およしよ嘘うそだよ、ばかばかしい。』女房はしかるように言つて、

爛徳利かんどくりをちよつと取つて見て、『まだあるくせに。』

『あつてもいいよ、二合取つて来てくんねエ。明日口あしたがきけねえ

から。』

『だれにさ、だれに口がきけねえんだよ。ばかばかしい。』

『なるほどうまいことを言うじやアないか、今日おいらが蔦屋つたやへ

行つて今朝けさの一件を話すと、長屋の者が、懐ふところが寒くなるから頭へ逆のぼ上せるだつて言やアがる。うまいことを言うじやアないか。そいでおいらア四合ずつ毎晩逆のぼせぐすり上薬を飲むが鉄道往生する気になんねえツて言つたら、お神さんにそう言つてもう二合も買つてもらえツてやアがる。』

『大きにお世話だつて言つてやればいいに。』と女房は言つて見たが、笑わざるを得なかつた、娘も笑つた。

『だから二合取つて来てくんねえツてんだ。』

『ほんとに今夜はおよしよ、道が悪くつてお菊がかあいそうだから。』女房は優しく言つた。

『いいよわたし行つて来ても。』娘は針を置いた。

主人は最後の酒杯をじつと見ていたが、その目はとろんこになつて、身体がふらふらしている。

『やっぱり四合かな。』

三人とも暫時無言。外面はしんとして雨の音さえよくは聞こえぬ。

『お前さん薬が利いたじやアないか。』

『ハハハハ』主人は快く笑つて『しかしおいらいくら逆上せても鉄道往生はご免だ。ドラ床の中で朝まで安楽成仏としようかな。今朝の野郎なんかまだ浮かばねエでレールの上を迷つてるだろうよ。』

『チヨツ薄気味の悪イ！ ねエもうこんなところは引つ越してし

『まいたいね工。』女房は心細そうに言った。

『ばか言つてらア、死ぬる奴は勝手<sup>やつ</sup>に死ぬるんだ、こつちの<sup>せえ</sup>為じやアね工。踏切の八百屋で顔が売れてるのを引越してどこへ行くんだイ。死にたい奴はこの踏切で遠慮なしにやってくれるがいや、方々へ触れまわしてやらア、こつちの商売道具だ。』

あくまで太い事をいって、立ち上がって便所へ行きながら、

『その代わり便所の窓から念仏の一つも唱えてやらア。』

『あれだもの』女房は苦い顔をして娘と顔を見合した。娘はすこぶるまじめで黙っている。主人<sup>あるじ</sup>は便所の窓を明けたが、外面<sup>そと</sup>は雨でも月があるから薄<sup>うす</sup>光<sup>あかり</sup>でそこら<sup>おぼろ</sup>が朧<sup>おぼろ</sup>に見える。窓の下はすぐ鉄道線路である。この時傘<sup>かさ</sup>をさしたる一人<sup>ひとり</sup>の男、線路のそばに立

つていたのが主人あるじの窓をあけたので、ソツと避よけて家の壁に身を寄せた。それを主人はちらと見て、

『何を言つても命あつての物種ものだねだ、』と大きな声で独ひとりごと言ことを初めた、『どうせ自分から死ぬるてエなアよくよくだろうが死んじまえば命がねえからなア。』

この時クスリと一声、笑いを押し殺すような氣勢けはいがしたが、主あ人はそれには気が付かない。

『命せえあればまたどんな事でもできらア。銭がねえならかせぐのよ、情人いろふじつが不実なら別な情人いろを目つけるのよ。命がなくなりやア種なしだ。』

娘が来て、

『何言ってるの？』気味わるそうに言う。

『命あつての物種だて工事よ、そうじやアねえか、まアまア今夜なんか死しにがみ神に取っ付かれそうな晩だから、早く帰ってよく気を落ち着けて考えるんだなア。』

『何言ってるの。』

『まア出直した方がいいねエ、どうせ死ぬなら月でもいい晩の方がまだしやれてらア。』

『いやな、』と娘は言つて座敷の方へどたばたと逃げ出してしまつた。

『出直した、出直した。その方がいい、あばよ、』と言つて主人あるじはよろめきながら出て来たが、火鉢の横にころりと寝たかと思う

とすぐ大いびきをかいている。

『ほんとにこんなところア早く越してしまいたいねえ、薄気味の悪い。しまいにはろくなことはないよ、ねえお菊。』母親おふくろはやはり針仕事を始めながら、それも朝が早いからもうそろそろ眠そうな目つきでいう。

『そうねえ。』娘はさほどにも思わぬよう。

『この月になつてからでも今朝けさのが三人目だよ、よくよくこの踏切はけちがついていると見える。』

娘は黙つて相手にならない。二人は無言で仕事をしていたが、母の手は折り折りやんで、その度たびごとにこくりこくりと居眠りをしている。娘はこのさまを見て見ないふりをしていたが、しばらく

くしてソツと起き上がって土間を下りた。表の戸は二寸ばかり細目に開けてあるのを、音のせぬように開けて、身体を半分出して四辺を見まわすようであつたが、ツと外に出た。軒下に立っているのが昨夜お梅から『お菊さんによろしく』と冷やかされた男。『オヤ磯さん？ なぜそんなところに立つてるの、お入りな、』と娘は小声でいう。

『入りそこねて変だから今夜はよそうよ、さつき親父さんが出直せつて言ったから、』とにやにや笑いながら言う。

『アラお前さんだったの？ 何だか妙なことを言つてたと思つたよ。まあお入りな、かまわないから。』

『出直そうよ、ぐずぐずしてるとまた鉄道往生と間違えられるか

ら、』と行きかける、

『人をばかばかしい、』と娘はまだ何か言いかけると内から母おふく親ろがあくび声で、

『お菊もう寝るから外をお閉め。』

『何だか雲ぎれがして晴れそうだよ、』と嘘うそを言ってだまかす。

『オヤ外にいたの、何してるんだねえ、早くお閉めよ、』と険けんど貪んに言う。

『星が見えるよ、』と言って娘は肩をすぼめて、男の顔を見てにつこり笑う。

『早くお入りよ、』と言って男は踏切の方へすたこら行ってしまったが、たちまち姿が見えなくなった。娘は軒の外へ首を出して、

今度はほんとに空を仰いで見たが、晴れそうにもない。霧のよう  
な雨がひやひやと襟えりくび頸くびに入るので、舌打ちして『星どころか』  
と微かすかに言ったが、荒々しく戸を閉めたと思うと間もなく家の内  
ひっそりとなってしまった。

(明治三十三年七月作)



# 青空文庫情報

底本：「武蔵野」岩波文庫、岩波書店

1939（昭和14）年2月15日第1刷発行

1972（昭和47）年8月16日第37刷改版発行

1983（昭和58）年4月10日第47刷発行

底本の親本：「武蔵野」民友社

1901（明治34）年3月発行

初出：「太陽」

1900（明治33）年10月発行

入力：h.saikawa

校正・・noriko saito

2004年9月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 郊外

国木田独歩

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>